

『篁物語』の構成と言葉

陣野英則

はじめに

平安時代前期の漢詩人として、また数多くの説話の主人公としても名高い小野篁（八〇二―八五二）を主人公とする『篁物語』の構成については、おおむね二つの部分から成るものととらえられてきた。中世の『源氏物語』古注釈書『河海抄』と『花鳥余情』、そして『仙源抄』に本文が引用されながら、永らくその存在を確認しえなかった『篁日記』（『篁が日記』「小野篁記」とも）であったが、それに相当する『小野篁集』（宮内庁書陵部蔵）を初めて紹介した後藤「一九二七」は、次のように構成をとらえていた（傍線は引用者による）。

第一段は篁と異腹の妹との情事に筆を起し、妹の悶死するに至る事を叙し、第二段は右大臣の息女を懇望する話より、遂にその女婿となつて榮達することを書いてゐる。

「第一段」と「第二段」という呼び方で、二つの部分の内容を簡潔にまとめてゐる。この呼び方は、たとえば『篁物語』に関する

初の作品論ともいふべき今井「一九三五」でも踏襲されている。一方、「前半」「後半」という言い方もしばしば用いられてきた（たとえば彰考館蔵『篁物語』（二本）の紹介に関わつた宮田和一郎による新釈の「解題」など）。

その後、この作品の構成に関しては、岩清水「一九五五」が「第一話」「第二話」と呼び、また菊田「一九五七」および菊田「一九六四」が「第一部」「第二部」と呼んで、両者の差異をとらえつつ、成立過程の問題と関わらせて論じている。このころ以後は、「第一部」「第二部」という呼び方がほぼ定着しているといえよう。¹⁾

二つの部分のうち、妹の死については『古今集』哀傷部の篁の歌（八二九番）が、また右大臣の姫君への求婚については『本朝文粹』巻七所収の「奉右大臣」という篁の記した書状が、それぞれ素材としてみとめられている。岩清水「一九五五」は、「元来別の話である両者」が「第二話」における「亡妹の事」によつて「結ばれてゐる」という理解を示す。このようなおさえ方が大方

に支持されているようだが、津本「一九七七」は後半を「前半部を受けた展開」ととらえ、「第一部、第二部と言う区分も敢えて設ける必要はない」という見解を示しており、津本「一九九二」でもこの見解を堅持している。

一方、石原「一九七七a」は、「後半部の筆者」が「前半部の主題を考え、それを揺曳しながら執筆していることは明らか」としつつ、「後半部」は、「妹の靈魂に心を奪われた男の不思議な物語」として「事実上終わっている」という、きわめて重要な指摘をしている。要は、「この男は、若き間はいとねんごろにあはで……」（二五ウ）と始まる末尾部分（彰考館文庫蔵甲本で二十一行分）について、石原論文は、「語る内容・時制・文体がまったく違う」ものであり、「篁への注記的記事のごとき意味しかもたない」というのである。

近時、筆者は『篁物語』に関する梗概、解説、それに二部構成説をふくむ先行研究の数々を一度すべて度外視した上で、この物語を精読してみたが、いわゆる「第一部」と「第二部」との違いよりも、石原論文が指摘する末尾部分の異質さの方により大きな違和感をおぼえた。本稿では、「第一部」と「第二部」という構成区分の問題を指摘し、後藤「一九二七」が本作品の研究の出発点で用いた「段」という語を改めて用い、あわせて末尾部分の異質さをふまえ、「第一段」から「第三段」という三区分別を提唱する。

なお、『篁物語』の構成の問題は、成立に関する議論とも関わりがでてくる。筆者は、『篁物語』の成立過程の解明をめざして

はいない。また、外部徴証なくして成立の過程などを実証することはほぼ無理だと考えるが、新たな構成説にもとづくことで成立過程に関するいくつかの可能性が考えられる面もあるので、慎重に言及してみることにしよう。

一方、これまでは二部構成説が前提となっていたため、(本稿にいう)第一段から第二段にかけてのコンテクストが検討されることほとんどなかったという問題もある。そもそも、この作品は「言葉 discourse」の分析さえあまりなされてこなかったが、近年では、この物語が「極めて意識的に創られ」ていること(三浦「二〇〇〇」)、あるいは「一つの物語として語る方法が確立されつつあったこと」(中村「二〇〇九」)に対して意識的な論考もある。さらに湯淺「二〇一〇」は、「継子譚の方法に則りながら」それを異化」していると説く。この論旨の妥当性については措くとして、『篁物語』の方法を正面から考察する論がようやく現れてきたといえよう。ただし、これらの論考のいずれも、検討の対象は第一段限定である。こうした研究状況にあって、本稿では全体を充分に論ずることは無理だが、特に第一段から第二段にかけての恋の物語に関わるコンテクストの把握を試みたい。

一 これまでの二部構成説

『篁物語』を二部構成とみる説は、先述のとおり定説化している。異説としては、山口「一九六七」の「成立」説(初出は一九五七年)があった。これは、篁と異母妹との恋、妹の死と亡霊出現、右大臣の三の君との結婚という三グループに分かつ説で、素材と

しての篁関連の説話群からいかに物語が形成されたかという観点による区分である。菊田「一九六四」は、「素材そのもの」に「立ち返って、そこに章段わけの基準を求める」ことを批判している。そのとおりであろうが、山口論文の三部構成説にしても、二部構成説にいう「第一部」を二分割しているということであって、後半のとらえ方には違いはない。

この物語の構成についてもつとも丹念に論じているのは、菊田「一九六四」であろう。³⁾これは、菊田「一九五七」で示した説を発展させた論考で、「第一部」を「五つの小話（章段）」に、「第二部」を「三つの小話（章段）」にそれぞれ区分している。

全体の五分の一弱にあたる「第二部」についての菊田論文の区分を確認しておくと、右大臣の三の君との結婚成立までを「一段」、妹の亡霊が現れて七日間も三の君のもとを訪れなかったのち、亡き妹のことで三の君に怨まれるところまでを「二段」、そして「この男は、若き間は……」（二五ウ）と始まり、その後の栄達と三の君との円満な関係などに言及する末尾部分を「三段」としている。この区分には、特に無理なところはない。ただし、石原「一九七七a」のいうとおり、「第二部」の「二段」で主人公の物語が「事実上終っている」こと、また「三段」（末尾部分）が「注記の記事」であることに留意する必要がある。

以下、本稿では菊田論文にいう「第一部」を「第一段」、第二部の「一段」と「二段」を「第二段」、そして「第二部」の「三段」を「第三段」と呼ぶことを徹底する。

二 第二段における主人公の異様さ

まずは、この物語の第一段の最後のあたりから、第二段の初めの部分を引用してみる。

①その人（「妹」、七日は、なしはててもほのめくこと絶えざりけり。三年すぎては、夢にもたしかに見えざりけり。なほかなしかりければ、初めのごとしてなん、まかせたりける。妻にも寄らで、ひとりなんありける。時の右大臣のむすめ、たまへ、とふみをおもしろく作りて、（右大臣ガ）内裏に参り給ふとて御車よりとほり給ふごとくに、ついふるまひて、奉れたぶに、……（二一オ～二二オ）

*とほり給ふごとくに——とりたまふとに（彰）——トホリタマフコト
二（承）

妹の亡霊は三年経過すると現れなくなったとされ、さらに期間是不明だが、主人公は独身でありつづけたという。その直後で、傍線部のように「右大臣のむすめ」との結婚を望む主人公の語へと転じている。なお、現存諸本のいずれも、ここで改行はしていない。

ここに違和感をおぼえるのは当然であろう。右大臣という権門の「むすめ」との結婚を望むこと、しかも右大臣本人への「ふみ」をしたため、直接奉る行為は、第一段の主人公のあり方からは想像しがたい。何らかの接続を示す語句があつてほしいところでもある。とにかく、この主人公は、望みどおりに「右大臣のむすめ」、三の君との結婚を果たす。

菊田「一九六四」によれば、ここからの物語の「主題」は「積極的な行動によって右大臣の三の君との結婚に成功した輩を、理想的人物として描き出す」ことだという。しかし、そもそも第二段における男主人公のありようは、「理想的人物」などとみとめられるだろうか。また、右大臣の三の君との結婚は「成功」なのだろうか。第三段の内容一切を記憶の中から除いて第二段を読み進めてみよう。要は、ただ素材に物語を前から順にたどって読んでゆくということである。そうすると、第二段では、男主人公の結婚相手に対する常軌を逸した態度ばかりが際立ってみえる。右大臣邸に婚として訪ねてゆくときのいで立ち、手に持った「文巻」(二二ウ)を初めて逢う三の君にいきなり与えようとする奇行、結婚披露宴が催される「三日の夜」(二三オ)、童一人だけ連れ去るという非常識。経済力のなさ、また身分上の限界などがあるにしても、はるかに身分の高い女性に対する態度としてあまりに挑発的であり、傲慢でもある。型破りな求婚の方法、および(語られてはいないもの)秀逸な学才が右大臣から高い評価を受けたことは推察されるが、妻への態度を「理想的」とみることはおおよそ無理だろう。また、自らが望んだ結婚を実現しているのに、右大臣家との安定した関係を築き、出世を図ろうとする姿勢はまるでみえない。つまり、本気で出世・栄達を望んでいる男の物語とはおもえないのである。

一方、妹の亡霊出現については、そのタイミングに留意する必要がある。

②三日の夜、「右大臣側ハ」といいかめしうて待ち給ふ。(男ハ)

ただ童ひとりぞ具し給ひける。さて、このころ、妹のありし屋に行きたりければ、いとかなしかりければ、寝にけり。妹、見し人にそれかあらぬかおほつかなものわすれせじと思ひしものを

と言ひければ、かの殿にも行かぞ泣きをりける。

(二三オ―三三ウ)

*行かぞ―いかにてそ(彰)―イカテソ(承)

傍線部の「このころ」は、結婚が正式に決まった「三日の夜」の直後を指すとみてよからう。男主人公は結婚成立からすぐあと、わざわざ「妹のありし屋」へと出向いたのである。亡き妹への恋心は、右大臣の三の君という高嶺の花との結婚に至ったこの時点でも、なおつづいていた。この結婚は、男主人公にとつての負い目となっていたようでもある。

それから七日間も右大臣邸を訪れなかつた男主人公は、ようやく三の君のもとへ向かい、「すなほなりける人」(二四オ)であるがゆえに、包み隠すことなく事情を伝えたという。妻は、殊勝なことに夫と亡き妹との関係を「いとあるべかしきこと」、また「あはれのこと」(二四オ)と一度はみとめた上で、夫の心が自分に向いていないことを「あな恥づかし」と訴える。それに対する男主人公は、「試しにあなたとお別れしましょうか」という意味の挑発をした上で、次の本文③の傍線部のごとき、捨て台詞を発する。この台詞こそ『篁物語』第二段の最後に位置している。なお、本文③では第三段の初めの部分もあわせて引く。

③「別れなばおのがさままなりぬともおどろかさねばあら

じとぞ思ふ

出でてまかりしを、引きとどめて今日までさぶらはせ給ふ、うるさしかし」と言ひける。この男は、若き間はいとねんごろにあはで、ほかに夜がれなどもしけり。なり出でて宰相よりも上になりにけり。これなん名に立つ筆なりける。

(二五オ―二五ウ)

傍線部では、初めて男主人公が三の君と逢った際のことを話題にしている。先にも言及したように、男主人公はいきなり「文巻」をさしだしたが、三の君は受け取らなかった。男主人公が「文巻」を帯にさし挟んで出てゆこうとしたところ、三の君は男の「皮の帯を取りて引き止め」たので(二三オ)、男はそこにとどまった。本文③で、男主人公は結婚を決定づけた三の君の一瞬の判断と行動をとりあげ、自分を夫として「さぶらはせ」ることが「うるさしかし」、すなわち「わずらわしいよ」と言い放っているのである。結婚から十日程度であるうか、早くも夫婦関係の危機がやってきている。しかも、男主人公と妻三の君との具体的なやりとりが語られるのは、これが最後である。

第二段の物語において、男主人公の理想性などということはいかがうかがうことができないし、右大臣家の婿となつて出世・栄達が約束されたなどと解することも、まず無理であろう。

三 第二段と第三段とのギャップ

従来は、第三段に書かれていることをかぶせるようにして、第二段の物語内容がとらえられていた。実は、第三段の異質さを鋭

く指摘した石原「一九七七a」でさえ、惜しいかな、「右大臣の娘を得て栄達しても、妹の魂は彼の心をつねにおおっていつづける」ととらえている⁽⁴⁾。しかし、男主人公の栄達に関する言及は、第二段にまったくみられない。一方、「妹の魂」に関わることは第二段までであつて、第三段では一切ふれられない。つまり、栄達を果したあとも「妹の魂は彼の心をつねにおおって」いるとは読めないのだ。

このようにみると、第二段と第三段との間には大きなギャップがあるといわざるをえない。第二段の物語は、小野篁という歴史上の人物の出世・栄達を重ねて読むことを求めているように考えにくいのである。『本朝文粹』巻七・書状の、小野篁による「奉右大臣」を素材としていることは確実だが、そうした素材を利用すること、篁の出世・栄達を語ることは同一ではないだろう。菊田「一九六四」は、第二段と第三段(菊田論文における「第二部」)について、「叙事的・現実的・理知的・観照的」を「かし」の様式をもつ説話的(事実譚的・物語的)なものとして評している。これは、本稿にいう第三段の説明としては納得しうるものの、第二段についてはほとんどあてはまらないのではないか。

三の君との破局すら予感される第二段の末尾から、第三段の「めでたしめでたし」の展開はあまりにも飛躍が過ぎる。先の本⁽⁵⁾文③の波線部「若き間はいとねんごろにあはで、ほかに夜がれなどもしけり」は、かろうじて第二段の夫婦関係の延長上でうけとめられるが、そのあとは次のように記されている。先の本文③の直後から最後までを引く。

④才学はさらにもいはず、うたつくることもえたり顔がは、この国人にはたらずぞありける。この子こ、孫まごどもにて、かくうた詠

まぬはなかりけり。聞きたまはざりし姉ふたところは、いとわろき人の妻めにて、この御徳を見給ひける。いとよくなり出でければ、この三の君をまた二つなくもてかしづきたてまつる。今の人、まさに大学のせうを婿むこにとる大臣もあらむや。

〔右大臣ハ〕ただ心、かたち、才さいをとり給ふなるべし。又またあらじかし、かやうに思ひて文つくる人は。(二五〇―二六〇)

*さらにも―さうにも(彰)―サラニモ(承)

*うたつくる―山たつる(彰)―ウタツクル(承)

*子こ、孫まごどもにて―こんまうの、こて(彰)―コムコノ、コテ(承)

(意改)

*〔又〕の前の空白―アリ(彰)―ナシ(承)

夫婦関係についていへば、まさに理想的な「かしづき」方の方である。長い時の経過によつてこうした変化が起こらないとは限らない。この変わりようを否定したいわけでもない。ただ、このように変わつてゆくコンテクストがみえてこない点を問題視している。

その上、男主人公との結婚を了承しなかった姉二人は、いずれも「いとわろき人」、すなわちとても身分の低い人と結婚したので、出世した男主人公の支援を受けたという。典型的な末子成功譚のダメ押しである。そもそも、右大臣という権門の姫君二人がどうして「いとわろき人」と結婚せざるをえなかったのか―これまた、コンテクストが全然みえてこない話であり、話型にあわ

せた物語、もしくは話型のための物語とでもいいたくなる。

*

あらためて、第二段の物語について考えてみる。第二段が小野篁の書状「奉右大臣」を素材としていることは確かだが、にもかかわらず出世・栄達も、結婚の成功も語らない話を展開させているのは何ゆえか。そして、この段の物語はいったい何を語ろうとするのか。

青木「一九六一」は、「亡妹に対する篁の愛が、如何様にして三君への愛に結び付くかというような内省的経路は無視され、分裂した愛の様相を露呈している」と評した。しかし、第二段のみに限ると、三の君への「愛」を読み取ることはほぼ無理である。二節でみたとおり、三の君に対する傲慢さは常軌を逸しており、右大臣家との関係をステップアップのために利用しようという姿勢さえ見いだすがたい。その一方で、成婚の直後に「妹のありし屋」を訪れていることから、亡き妹への恋心はなおつづいていることがわかる。

そもそも、「奉右大臣」という書状には「賈第十二の娘、四徳しよとく双なごびなく、六行りくかう闕かけず」とあり、十二番目の姫君を並ぶ者もない方として讃えているが、そのような姿勢が『篁物語』の男主人公にはまるでみられない。この書状は、素材とはいっても、漢文で右大臣の娘を求めるといふ枠組みだけが利用されているものと位置づけるべきであろう。青木論文のいうとおり、男主人公の「内省的経路」が不明なので確かなことは論じにくいのだが、右大臣の姫君への求婚は、たとえば亡き妹への恋心を吹っ切ろうという

試み、あるいはそれを吹っ切ることのできない自分と訣別するための捨て鉢の行動とでもいふべきではないか。

四 『篁物語』の成立に関して

『篁物語』研究では、構成の問題が成立の問題とからめて論じられてきた。本稿では成立説をうちだすつもりはないが、主要諸説を瞥見した上で、新たな構成のとらえ方に即した場合、成立の問題がどのようにみえてくるのかということについて簡単に述べることとする。成立に関わる諸説は、安部「一九九六」が手際よく整理しているので、それを参考にしてまとめめるが、一部の微妙な説の位置づけは安部論文に従っていない。

まず、作品全体が一度に成立したのか、それとも二段階（かそれ以上）かという問題がある。前者のうち、十世紀後半または『源氏物語』以前の成立とする論考には、山口「一九六七」、阿部「一九六九」などがある。また、黒木「一九八六」は、作中の「兵衛佐」の年齢と父の官職に注目して花山朝から一条朝初期の成立と推測するが、全体が一度に成立したことを前面にうちだしてはいない。全釈の「解説」も、「源氏物語と同時期かそれ以前」（一六頁）の成立と説くが、これは「第一部」のことであり、全体の推論は控えている。

これらに対して、成立の時期を平安後期または末期、あるいは鎌倉時代とする説も、かつては少なからずみられた。だが、今日ではほとんど支持されていないようである。

一方、二段階の成立を唱えている論考は、第二段・第三段（通

称「第二部」）があとから足されたとみるもので、岩清水「一九九五」、菊田「一九五七」、西木「一九六二」、西木「一九六八」、それに大系の「解説」などがある。これらの諸論考では、表現・文体の相違点を根拠としてあげるケースが多い。地の文の係助詞「なむ」と「ぞ」、接続助詞、待遇表現（特に尊敬語の多寡）などが前半と後半とで大きく異なるという。たしかに、それらの違いは現象としてみとめうる。ただし、その違いを二段階成立の根拠としうるかどうかは別の問題である。たとえば尊敬語については、第二段以降で増えるのは（一部に微妙な用法があるものの）、右大臣とその三の君という高貴な人物が物語の中心的人物となり、かつ男主人公もその右大臣家の婿になろうかという話なのだから、尊敬表現が大幅に増加するのは当然であろう。

その後、安部「一九九六」の語彙・語法に関する詳細を極めた研究により、成立の時期に関する議論の精度は格段に向上し、第一段については十世紀末までに成立した可能性がきわめて高いことが実証された。一方、第二段・第三段については、中古末期以降の語彙がわずかにみられるという。第二段の「しりある」（二二ウ）と第三段の「えたり顔」（二五ウ）である。このことをどうみるか。安部論文が示すように、それは慎重に考慮されるべき課題として残されている。なお、村田「二〇〇五」の形容動詞に関する研究でも、『篁物語』が平安前期の特徴を備えていることが論証されている。

問題は第二段である。前節までの検討をふまえれば、第一段と第二段が一人の手によってまとめられた可能性も考えられなくは

ない。ただし、二段階にわたる成立をつよく否定しなくてはならない理由もない。また、全書の「解題」のように、既存の二つの物語をひきとつて合成させたという推論も、やはり積極的に否定しうるわけではない。いずれにしても、現存する『葦物語』第一段と第二段との緊密な関係がみとめられるとすれば、そのようにまとめた作者もしくは編者の當為こそ重要であり、そこに至る過程がどうであれ、『葦物語』を読み解く上ではさほど気にしなくてもよいようにもおもわれる。

一方、第三段が後人の「さかしら」によると推測したのは石原「一九七七a」であつたが、たしかにそうした可能性も考えられるとおもう。ただし、その場合、「さかしら」がなされる以前の物語の終末部はどうなっていたのか。第二段の末尾のままでは尻切れという感もあるが、答えを出すことは困難である。実は、第一段と第二段をまとめてきた作者が、そのあとにふさわしい物語をつないでゆくことが困難になつてしまい、あのような第三段を足して、いわばお茶を濁してしまつた、という可能性もなくはないようにおもう。

『葦物語』に限つたことではないが、平安時代（特に中期まで）の作品の生成、成立の様子を想像することにはどうしても無理がある。ここではこれ以上立ち入ることはしない。あくまでも可能性としてゼロではないという事態も排除しないという方針で考えしてみた。

五 恋の物語のコンテクスト

『葦物語』の文学史における位置づけについて、先行研究の中では、たとえば岩清水「一九五五」が、「実録から虚構化の物語へと発展してあることを示すもの」と評している。この「虚構化」ということは、「つくり物語」への接近ともいえるよう。福家「一九九七」は、第一段の物語の素材となつた、『古今集』の「いもうとの身まかりにける時」に詠んだとされる哀傷歌「なく涙雨とふらなむわたり河水まさりなばかへりくるがに」（八二九番）が『葦物語』にあえて取り込まれなかつた点を重視し、そこに歌物語とは異なる「仮構の物語への傾斜」をみている。おそらく、そのとおりであろう。さらに、このことが第一段だけでなく第二段にまでわたっているのではないだろうか。

ここからは、第一段から第二段にかけてのコンテクストの把握に努めてみたいとおもう。紙幅に限りがあるので、恋の物語の展開という観点から解析を試みる。

(一) 恋の物語の始まり

まずは冒頭の一節をとりあげてみる。

⑤ 親のいとよくかしづきける人のむすめありけり。女のする才のかぎりしつくして、今はふみよません、とて、博士にはむつまじからん人をせん、とて異腹の子の大学の衆にてありけり、異腹なりければうとくて、(妹)「あひ見ず」などありけれど、知らぬ人よりは、とて簾越しに几帳立ててぞ読ませける。この男、(妹)いとをかしきさまを見て、少しなれゆ

くまみに、顔を見え物語などとして、文のてといふものをと
らせたりけるを、「妹ガ」見れば、「男ハ」角筆して一首をな
ん書きたりける。(一〇一―二〇)

異腹の兄による漢文の個人指導が始まる。「簾越しに几帳立て
て」という状況では、それとなく妹の「いとをかしさま」も察
せられることがあるのだろう。やがて男主人公は、傍線部のよう
に「顔を見え物語などとして」という行動を示すようになる。

この傍線部、諸注釈の解釈に疑問がある。たとえば「顔を見え」
については、「互に顔を合せ」(新釈)という解釈が多数派である
(他に全集・新講・全釈など)。だが、この傍線部の行為の主体は「こ
の男」であつて、それは下の「とらせたりけるを」まで一貫して
いると解されよう。「…を見ゆ」は受け身の表現で、「…を(人に)
見られる」の意である。男主人公は簾、几帳から越境して顔を見
せる。妹の方がこの時点で顔を見せることは、当時の貴族の常識
に照らしてもあり得ないだろう。顔を見せ合うという解釈は物語
の出発点を読み誤っているといわざるをえない。

また、「物語などとして」については主体を明示しない注釈も
多いが、全釈は「言葉を交わしたりもするようになったが」とす
る。しかし、先述のとおり、この主体もひきつづき「この男」と
解するのが素直であろう。ここは、男側のほぼ一方的な話である。

ここでの歌の贈答がつづいたのち、次のような一文がある。
⑥ かくいふ程に、人にくからぬ世なれば、いとけうとくなかり
けり。(三〇)

「人にくからぬ世」は、諸注釈が指摘するとおり、『古今集』恋

三の「こりずまに又もなきなはたちぬべし人にくからぬ世にしす
まへば」(六三二番)をふまえており、二人の恋を予感させるよう
な引歌にみえる。この傍線部の主体がまたわかりにくい。「妹
は篋にさうとうとしい仕打はしなかつた」(新釈)というよう
に、妹を主体とみる説が多いが(全集・全書・全釈など)、先の本
文⑤の傍線部の解釈が妥当であるならば、こうした地の叙述で妹
に焦点を絞るのはまだ早すぎるのではないか。「二人の間」がう
とうとしくないとする大系・新講の解釈の方が妥当であろう。

つづいて、本文⑥の直後、「師走」の「月」の場面も、みておく。

⑦ 師走のもちごろ、月いとあかきに、物語しけるを、人見て、
「たれぞ。あなすさまじ。師走の月夜ともあるかな」といひ
ければ、…(中略)…かくいふほどに夜ふけにければ、「妹」「人
うたて見んもの」とて入りにけり。男は曹司にとみにも入ら
で、うそぶきありきけり。(三〇―三三)

全釈は、「人」を「古参の女房あるいは、縁者など」(五六頁)
とし、「たれぞ。…」というのは、「二人の近くで面と向かつて
言われたのではあるまい」(五八頁)と解する。そのような理解で
基本的によかるう。疑問点は、「すさまじ」とネガティブに受け
とめられていた「師走の月夜」に、この兄と妹はどのような位置
関係で、どういうやりとりをしているのか、という点である。こ
の簡潔すぎる地の文から具体的に把握することは困難だが、まず
は傍線部の「物語しけるを」というところに留意したい。諸注釈
は二人で話していると解する。誤りではないかもしれないが、
「語りあっていた」(全釈)というと、ややニュアンスが異なるの

ではないか。本文⑤・⑥からの展開をふまえると、この段階で妹の方が対等に話をするのは考えにくい。のちに妹については「入りにけり」とあるが、これは屋外、簀子などに出ていたわけではなく、おそらく廂の間の端近な場所を外をうかがいつつ、御簾の外の男に応じていたといった様子であろう。なお、第三者の「人」は、屋内の女房の一人だとすれば、端近な場所にいる女性を誰と把握したわけでもなく、少し離れた場所から、聞こえよがしに言葉を送ったようにおもわれる。

(二) 身体的接触に至らない関係

本文⑤・⑦で兄妹の関わり、位置関係などをあえて詳しく検討したのは、『篁物語』における二人の関係の変化、展開をおさえてみたいからである。この点について、前田「二〇〇七」が「トポロジ的な考察」として簡潔に述べている。まずは、「簾と几帳」という「仕切りと通路の両方の役割を備え」た完全でない仕切りから、この物語は始まった。前田論文がいうとおり、「これなら、姿が見え、声が聞こえるけれど、手に触れることは出来ない」のである。その状況は、本文⑦の「師走の月夜」でも持続しているだろう。その少しあと、稲荷詣でに付き添う男主人公は、「先立ち、遅れて来ける」(六オ)とつかず離れずの関わり方である。妹側が了解した付き添いではないらしい。そして、次のようなやりとりがある。

⑧(妹ガ)まうでさまに困じにければ、兄せうといとほしがりて、「篁にかかり給へ」とて寄りければ、「妹」いいで、いないな」と言ひて、道中に去にけり。
(六オ―六ウ)

*いとほしがりて―いとおかしかりて(彰)―イトオシカリテ(承)長旅で疲れた妹を助けようと接近する男主人公だが、妹は離れてしまう。こうした状況にあつても身体的な接触は起こらない。それは漢文教授の場面でも常に一貫していただろう。

(三) たった一度の逢瀬、身体的接触

このあと、兵衛佐からの熱心な懸想がつづく。妹としては将来有望とおもわれる兵衛佐との文通にかなり積極的な姿勢をみせたが、男主人公のたくみな妨害により、兵衛佐との文通は阻止される。なおも兵衛佐からの手紙を待つらしい妹の様子に、男主人公は苦しみ、嫉妬心をあらわにする。こうした一件をきっかけにして、妹の心はようやく兄へと向かう。

⑨「人の御心も知らずや。」

あはれとは君ばかりをぞ思ふらんやるかたもなき心とを
知れ

*思ひぐまなや」といひければ、「男ハ」少し心ゆきて、
いとどしく君がなげきのこがるればやらぬ思ひも燃えま
さりけり

かくいひて心は通ひけれど、親にも包み人にも障りければ、
心とけて久しくも語らはずあり。されどいかでか入りけむ、
この妹の寝たる所へ入りにけり。
(二二ウ―二三ウ)

*思ひぐまなや―おもひくさなや(彰)―オモクアルヤ(承)(意
改)

妹は、傍線部の詠歌によつて、初めて自らの心が異腹の兄に向
いていることを示す。大変印象深い歌である。そして、そのあと

の二重傍線部で、初めての逢瀬となる。だが、この直後に「逢ふことは難かりけり」（二三ウ）とあり、身体上の交わりは、この二重傍線部の一度のみと解されよう。

興味深いのは、物語内における本文⑨の位置である。「篁物語」では、本文⑨のあたりがちょうど真ん中に相当するのである。細かく記すと、『篁物語』第二段まででいえば、その末尾は二五丁ウラの一行目で、本文⑨の傍線部のあと、「少し心ゆきて」がちょうど中央に相当する。一方、物語全体の最後は二六丁ウラの四行目であって、全体の真ん中というところ、二重傍線部の「入りにけり」のあたりになる。これは偶然なのだろうか。兄と妹二人の恋心をもっとも高揚し、ただ一度だけの逢瀬が語られる本文⑨を境にして、二人の間には二度と身体的接触が起これないのである。身も心も結ばれるのは、この⑨に限られるという徹底した悲恋の物語——これは、意図的に「計算」された展開なのかもしれない。⁷⁾

(四) あらためて遮蔽される関係

その後、妹は懐妊、秘密の関係も妹の母に知られるところとなる。妹は部屋に閉じ込められた上、「鍵の穴」まで「土」で塗り込められてしまう。ひそかに男主人公が妹の居場所に行ってみると、小さな「壁の穴」があったので、これを少しでも大きくなるようにとほじって、妹と交信する。ただし、手を入れたりして接触することはないようだ。

妹は、三浦「二〇〇〇」が注目するように、「身」という言葉を用いた歌を三首連続で詠んだのち、この壁の中で絶命する。前田「二〇〇七」によれば、この「穴は、女の死後、冥府との通路

にもなった」という。なお、妹の死については男主人公が直接見て確認していることが語られるが、その死体に関わる叙述はいっさいみられない。次の場面では、妹の「添ひ臥す心地」がして、その「声」も聞こえるのだが、探ってみても「手にもさはらず、手にだにあたらず」（二九ウ）とされている。身体的接触の不可能が象徴的にあらわされている。この亡霊が第二段でも登場することとは、この接触不能の状態の継続を示唆するだろう。

(五) 頂点を挟んだ物語の構図

ここまで、兄と妹の二人の位置関係などを検討しつつ、物語の真ん中に位置する身体上の交わりを描く頂点を境にして、その前後のいずれにおいても二人の身体を遮蔽する状況が継続していることをとらえてみた。ほかにも、この頂点の前後における照応関係、もしくは対照的な関係がさまざまあるようだ。たとえば、兄妹の関係は、頂点の手前では常に男主人公の方が能動的であり、さまざまはたらきかける立場にある。しかし、頂点を過ぎたところから、妹の方が二人の関係を主導するようにみえる。

一方で、「ふみ」の頻出も留意すべき点であろう。このことについては、陣野「二〇一七 a」において、第一段冒頭と第二段冒頭との対照性を論じているが、第二段における「ふみ」関連のエピソードが第一段の内容と響きあう点はほかにもあるようだ。たとえば、第二段の男主人公が「ふくめるふみの帙」（ちつ）——彰考館蔵甲本「ち、」（意改）、すなわち「文卷」（二三ウ）を右大臣の三の君に渡そうとした行為はどうか。なぜ漢文の書かれた卷子本なのか。この行為、自分の学才を示威するというより、妹と

の関わりがあるのではないか。男主人公が本当に恋していた相手は、漢文の読み方を男主人公から教わっていた。そんな事情を右大臣の姫君は知るはずもないが、男主人公には漢籍を習っていた妹への思いがあつて、結婚相手への不躰な行動に反映させている可能性があるようだ。

ここまで、一部分ながら、『篁物語』の言葉に留意して恋の物語の展開がいかに図られているのか、またいかなるコンテクストが形成されているのかを論じてみた。端的にいえば、『篁物語』の表現、言葉はなお検討されるべき意匠を多くふくんでいるのではないか。

六 つくり物語へ向かう『篁物語』

——むすびにかえて——

以上、『篁物語』の二部構成説の問題点を指摘した上で、第一段から第三段での三部に分かつべきことを論じた。特に第二段については、これまで説話などと評されてきたが、説話的といえるのは『篁物語』末尾、第三段のみであり、第二段は第一段の悲恋物語をひきうける面がつよい。また、第二段の男主人公は、出世・栄達をめざす人物として定位することは困難であつて、矛盾・葛藤に苦しむ人のようだ。第三段に関しては、『伊勢物語』などにもしばしばみられる注記的部分ともいえるが、第一段および第二段は、歌物語的というより、つくり物語へと向かう傾向がつよいといえるだろう。そうした点についての検討は、なおいっそう多角的に進めてゆきたい。

『篁物語』に関わる議論は、さらなる開拓の余地もありそうだとすれば、井野「二〇一一」のように、『源氏物語』（浮舟物語）における『篁物語』引用を論じた成果がある。『篁物語』という悲恋物語は、さまざまなかたちで後代のつくり物語作品に影響を与えている可能性もあろう。これもまた今後の課題としたい。

※『篁物語』の本文は、平林文雄・水府明徳会（編著）『増補改訂小野篁集・篁物語の研究』（和泉書院、二〇〇一年）に収載の彰考館文庫蔵『篁物語』（甲本）の影印に拠り、冷泉家時雨亭文庫蔵・承空本『小野篁集』などの本文も参照しつつ、筆者が校訂した。*で異同についての情報を簡略に示している（～）内の略号は、彰考館文庫蔵甲本、承空本。なお、引用文中の傍線類、（ ）内の注記などはすべて筆者が施した。

※『古今集』の本文は『新編国歌大観』に拠り、『本朝文粹』の本文は、『新日本古典文学大系27本朝文粹』の訓読文に拠った。

※『篁物語』もしくは『小野篁集』の注釈書・訳書の略称は次のとおりである。

新釈 宮田和一郎（校註）「一九四八」『王朝三日記新釈』健文社

全集 西尾光雄・秋山虔・池田彌三郎・松尾聰（訳）「一九五四」『現代語訳日本文学全集 更級日記 平中物語 篁物語 堤中納言物語』河出書房『篁物語』の訳は池田

全書 山岸徳平（校註）「一九五九」『日本古典全書 平中物語 和泉式部日記 篁物語』朝日新聞社

大系 遠藤嘉基・松尾聰（校註）「一九六四」『日本古典文学大系 77 篁物語 平中物語 濱松中納言物語』岩波書店『篁物語』の校注は遠藤

新講 石原昭平・根本敬三・津本信博「一九七七」『篁物語新講』「注解篇」武蔵野書院

全釈『平野由紀子「一九八八」』『小野篁集全釈 私家集全釈叢書3』風
間書房

(1) 岩清水論文の改訂版(一九七一年)では、「第一部」「第二部」と改められている。また、全書・大系の「解説」は、「第一部」「第二部」と「第二部」としている。さらに、相対的には新しい注釈書である全釈の本文においては、それぞれの冒頭に「(第一部) および」「(第二部)」という見出しまで立てられている。

(2) 本稿では、作品名を『篁物語』と表記し、引用本文も彰考館文庫蔵『篁物語』(甲本)にもとづいて校訂している。現存諸本の中では時雨亭文庫蔵の承空本『小野篁集』が鎌倉期書写で最も古く、宮内庁書陵部蔵『小野篁集』の「親本」にあたる可能性も高い(久保木「二〇〇二」など)。ただし、安部「二〇〇九」、安部「二〇一〇」などの詳細な検討を参照してみても、承空本(および書陵部蔵本)と、彰考館文庫蔵甲本のいずれの本文が優れるかということとは容易に決めがたい。なお、安部「二〇一〇」は、承空本の書名「小野篁集」が、「篁物語」に比べて「より古い書名であった概然性が高くなった」とするが、平安期の書名が「小野篁集」であったという証拠は何もない。また、「集」「物語」「日記」のいずれか一つを正解と決めるのも困難である。本稿では、五節で言及するような内容上の特性をふまえ、『篁物語』の名を優先することとした。

(3) 菊田「一九六四」の題目は「構造についての試論」であり、「二部構造」「二元的構造」といった語もよく用いられているが、その「構造」は、本稿にいう「構成」にあたる。

(4) 石原「一九七七」でもほぼ同様で、「後半の現実社会で右大臣の娘を得て栄達しても、妹の魂は彼の心をつねにおおいつくす」と述べられている。

(5) 「しりある」には異同がある。彰考館蔵甲本で「きてしりあるくつ」とある部分、承空本では「キテ、リキタルクツ」、また書陵部蔵本も「きて、りあたるくつ」とある。「しりある(尻居)」は、「古

今著聞集」などの用例が確認され、尻もちの意である。これまで、「かかとの平たくなつた靴」(大系、あるいは「靴後部側壁面(踵)が倒れて履いている状態」(安部「一九六九」、傍線は原文通り)など)と解されるが、後代までふくめて「くつ」に関わる「しりある」の例が見いだしがたく、疑問が残る。

(6) 新講の「注解」(担当は津本)では、「(特に男は)そう親しみがたく疎遠だという感じはなかった」と説く。叙述の焦点化のあり方として、そう解してよい可能性もある。

(7) 仮にこうした「計算」がなされたとすれば、一回的創作ではなく、推敲・修訂を経てようやく成ったともいえる。なお、短篇であれ長篇であれ、物語において(また劇・小説等々でも)、真ん中のあたりに高揚する場面をおく事例は少なからず見いだされるようだ。たとえば『源氏物語』「藤のうら葉」の巻末など、全体の分量に照らすとおよそ真ん中のあたりになる。この問題については、別途比較・考察を行ってみたい。

(8) 陣野「二〇一七b」でも、同様の問題をより圧縮してとりあげた上で、特に『篁物語』における「ふみ」について、「公」と「私」、男と女、漢と和といった対関係がこのテクストにおいては相補的であるばかりでなく、それぞれ「反転する可能性を秘めたものでもあることを示す語となつている点に留意した。あわせて、そのように硬直しない可変的なあり方が、日本の「文」の特徴であることも指摘した。

引用文献

青木 生子「一九六一」付「篁物語」『日本古代文芸における恋愛』第二篇—第二章—第二節—二—四 弘文堂
安部 清哉「一九九六」『語彙・語法史から見る資料——『篁物語』の成立時期をめぐって——』『国語学』一八四 国語学会
安部 清哉「二〇〇九」『篁物語』承空本(小野篁集)に関する研究課題『人文』七 学習院大学人文科学研究所

安部 清哉「二〇一〇」「『簞物語』の井野葉子氏」「源氏物語」浮舟巻での引用」説補強ならびに祖形小考」『月本雅幸・藤井俊博・肥爪周二(編)『古典語研究の焦点』武蔵野書院

阿部 俊子「一九六九」「簞物語」『歌物語とその周辺』第二篇B第一章 風間書房

石原 昭平「一九七七 a」「簞物語論」石原昭平・根本敬三・津本信博『簞物語新講』『研究篇』武蔵野書院

石原 昭平「一九七七 b」「簞物語」における招魂——主題性とのか、わり——『帝京大学文学部紀要(国語国文学)』九 帝京大学文学部国文学科

井野 葉子「二〇一〇」「浮舟物語における簞物語引用」『源氏物語 宇治の言の葉』I 第四章 森話社(↑初出は二〇〇八年)

今井 卓爾「一九三五」「簞物語」『平安朝日記の研究』第二部 第七章 啓文社

岩清水 尚「一九五五」「簞日記(簞物語)」久松潜一(責任編集)『日本文学史 中古』中期 第四章 1—3 至文堂

菊田 茂男「一九五七」「簞物語成立論」『文芸研究』二六 日本文芸研究会

菊田 茂男「一九六四」「簞物語の構造についての試論——簞物語の研究(第一部)——」『東北大学文学部研究年報』一四 東北大学文学部

久保木哲夫「二〇〇二」「小野篁集」財団法人冷泉家時雨亭文庫(編)『冷泉家時雨亭叢書 第六十九巻 承空本私家集上』「解題」朝日新聞社

黒木 香「一九八六」『簞物語』成立考——兵衛佐を手掛りとして——『国文学攷』一一二 広島大学国語国文学会

後藤 丹治「一九二七」「新たに知られた小野篁日記」『国語と国文学』四一—二 国語と国文学編輯部

陣野 英則「二〇一七 a」「古典テクストの中の越境と交流——『簞物語』を例に——」『文学・語学』二二八 全国大学国語国文学会

陣野 英則「二〇一七 b」「第一部 総論」河野貴美子・Wiebke DENCKE・新川登亀男・陣野英則・谷口眞子・宗像和重(編)『日本「文」学史 第二冊「文」と人びと——継承と断絶』勉誠出版

津本 信博「一九七七」「簞物語」の成立をめぐる——石原昭平・根本敬三・津本信博『簞物語新講』『研究篇』武蔵野書院

津本 信博「一九九二」「簞物語」『国文学 解釈と教材の研究』三七—四 学燈社

中村 祥子「二〇〇九」「古今歌と『簞物語』——八二九番歌から紡がれた物語——」工藤進思郎先生退職記念の会(編)『工藤進思郎先生退職記念論文・随想集』工藤進思郎先生退職記念の会

西木 忠一「一九六二」「簞日記」考(三) 文体について——『平安文学研究』二九 平安文学研究会

西木 忠一「一九六八」「簞日記」考(四) 愛の展開をめぐる——『滋賀大國文』五 滋賀大國文会

福家 俊幸「一九九七」「簞物語」と歌物語——異化の方法——『武蔵野女子大学紀要』三三—一 武蔵野女子大学紀要編集委員会

前田 速夫「二〇〇七」「簞——兄妹相姦の闇『簞物語』」(連載)『異郷遊歴 古典文学の異空間』第3回『国文学 解釈と教材の研究』五二—八 学燈社

三浦 則子「二〇〇〇」「簞物語」における和歌の構成について『国文白百合』三一 白百合女子大学国語国文学会

村田菜穂子「二〇〇五」「中古散文作品の形容動詞——ゲナリ型形容動詞とカナリ型形容動詞——」『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』第三篇第二章 和泉書院(↑初出は二〇〇一年)

山口 博「一九六七」「簞物語論」『王朝歌壇の研究』村上冷泉円融朝篇——後篇第六章 桜楓社(↑初出は一九五七年および一九六五年)

湯浅 幸代「二〇一〇」「『簞物語』と継子譚——書読み女の悲劇——」『駒澤国文』四七 駒澤大学文学部国文学研究会